

カンガルーシップ活動  
ネイバーサポートプロジェクト  
実施報告書

報告日	平成 28 年 2 月 25 日
学校名	筑波大学附属大塚特別支援学校 筑波大学附属高等学校
PTA会長名	戸栗 倫子 八児 正紀

実施活動名	「みんなの学校」鑑賞会
実施日時	平成 27 年 12 月 7 日
実施場所	筑波大学附属高等学校桐陰会館
実施目的	筑波大学附属校としての交流を深めると共に、インクルーシブ教育をテーマにした映画を鑑賞し、障がいの理解を深める機会とする。
実施内容	「みんなの学校」鑑賞会・懇談会
実施方法	筑波大学附属高等学校の保護者、生徒（希望者）と筑波大学附属大塚特別支援学校の保護者（希望者）で、インクルーシブ教育をテーマにした映画を鑑賞し、共に学ぶ
参加人数	186 名

報告事項	内容	筑波大学附属小・中・高等学校の生徒、保護者と筑波大学附属大塚特別支援学校の保護者が、インクルーシブ教育をテーマにした映画「みんなの学校」を鑑賞し、障がいの理解を深める機会とする。 書籍「『みんなの学校』が教えてくれたこと」を企画された島沢優子さん（筑波大学出身）に来て頂き、鑑賞後に大空小学校の様子、インクルーシブ教育の大切さについて話して頂く。
	結果	筑波大学附属高等学校の敷地内にある桐陰会館を利用させて頂くことができたため、長時間の利用が可能となり、上映会を 4 回開催することができた。幼稚園・小学校・中学校・高等学校・大塚特別支援学校の保護者、そして、小学生、中学生、高校生、大学生の合計 186 名と色々な方に見て頂くことにつながった。当日、書籍「『みんなの学校』が教えてくれたこと」を企画された島沢優子さんに来て頂き、インクルーシブ教育に取り組んでいる大空小学校のエピソードをお話下さったことで、内容により深みが出たように感じた。アンケート結果は好評で、「映画を見て良かった」、「誰かに伝えたいという」感想を持ってもらえた。
	所感	この「ネイバーサポート助成金」により、はじめて筑波大学附属校と特別支援学校の保護者間交流が実現でき、素晴らしい機会となった。はじめての企画で、離れたところにある 2 校での準備には、時間を要することもあり、また、どれだけの方に来て頂けるか等の不安も多かったが、予想以上の方に鑑賞して頂くことができた。また、「良かった」という感想が多く寄せられ、取り組んだ甲斐があったと感じている。障がいは保護者の相互理解も必要と感じる中、非常に有意義な企画であったと思う。これからも、このような企画を続け、定着していければと思う。

添付書類	収支決算書・参加感想
------	------------

# カンガルーシップ活動 ネイバーサポートプロジェクト 参加感想

提出日	平成 28 年 2 月 25 日
学校名	筑波大学附属大塚特別支援学校
学年	

## 《小学校》

- ・僕たちは普通に生活ができていますが、自分一人ではできない人もいます。でも、そんな人たちが「大空小学校」に来たことによって、皆に支えられ、何も変わりなく過ごせていることがすばらしいと思う。最初の「大空小学校」では、ほかの小学校と同じように、良い「普通」の小学校になるはず。でも、初年度に入って来られた一人の生徒により、全国的にも珍しいけれども、他とかわらない学校として存在している。そんな「みんなが助け合う」学校、社会がもっと増えていくことを、今回の映画で強く願うようになった。
- ・大空小学校のような、障害がある子とない子が差別・区別されることなく学べる場所、地域で見守る場所はすごく大切だと思う。私は、校長先生の指導がすごく良いと思った。家と学校が近いという利点のある、公立小学校のあるべき姿を実現しているからだ。私は、附属小の生徒として、何度か大塚の子と交流したことがある。今日も午前中、交流会があった。分かったことは、皆すごく明るいことだ。本当は皆と仲良くしたい子にとって、大空小学校は素晴らしいところだと思う。

## 《中学校》

- ・今回、途中までしか見るができなかったが、木村先生が生徒たちに、学校を作るとはということかと問いかけた時に、皆が一人一人が作っていくと言っていたのを聞き、一人一人の気持ちが学校を作っていく、その気持ちを作ったのがこの学校が不登校ゼロとなった理由ではないかと感じた。また、この小学校では、一人一人が仲間を思いやり、遊べていることが、とても凄いと感じた。
- ・今回時間の都合で途中までしか見るができなかったが、障害を持つ子どもでもちゃんと思いやりがあって、ちゃんと物事を考えているだとわかった。私が通う中学校では、特別支援の子どもたちを心良く受け入れていることを今回初めて知った。木村先生には、これからも大空小学校で特別支援の子と向き合って頑張ってもらいたいと思った。
- ・大空小学校は皆が通える、みんながやさしく通わせてくれる小学校だとわかった。この映画をより多くの人に見てもらい、大空小学校のことについて知ってもらいたいと思う。先生たちの、子どもたちへの気持ちもよくわかった。大空小学校の生徒たちには、将来がんばってほしいと思った。
- ・僕の妹は軽度の自閉症をかかえている。今、公立の普通学級に通っているが、受け入れるそのような許容を、この大空小学校に感じた。そのような許容は素晴らしいと思う。この学校全体の許容を全ての学校に作ってほしい。
- ・この映画を観て、たくさんを知ったような気になったが、実は私の中では一つの事がきちんと落ちていった。それは、一人の人間には、一つの与えられた道があり、それには上も下もない。平等である。対等である。そして、自分の道を歩む上で、思いやり、道徳心を身につける必要がある。そのために学校があるということだ。

## 《高校生》

- ・子どもにとって一番素直になりやすい理解してもらええる環境があるのは、子どもにとって一番良いと思った。中・高と、この小学校から出て行った子たちがどう進むのか、小学校まで理解してもらええる、しあうのが当たり前環境から、この情報、教師たちがいろいろ変わってしまう中、このままでいてくれるか、すごく心配になった。「理解する」だけでは済まされない、というか中・高という世代をどうするか、は更なる問題だと思った。
- ・反省の話、「『もう二度とやらない』の一時だけは、本当の気持ちなんだ」という言葉が特に心に残っている。大声で叱るのが体罰。本人の力を伸ばすことが重要、というの。私は将来、教育関係の仕事に就いてもいいなと思っている。この映画で見たことは、私に影響を与えると思う。私自身、普通の人と違うところがある。ただそれを「個性だから、大切にしよう」とかいうスローガンで他の人と同じように扱う教育をされてきたし、そういうのも大事かもしれないが、その子その子に合わせた、ぴったりな、寄り添った先生と生徒の関係を作っていくべきだと思った。とっても感動した。

## 《大学生》

- ・支援が必要な子どもたちの努力や先生方の手厚いサポートはもちろん凄い！と思ったが、一番すごいのは周りの子どもたちの協力や温かさだ。こんなに純粋に受け入れてられるなんてどんな教育なんだ？と最初の方は思っていたが、大空小が地域全体がそういう温かい場所だからなのかなと思った。
- ・こういった学校や地域で過ごせるのは幸せだろうと感じた。大人になったときに、こういった環境を作れるようになりたいと思う。

## カンガルーシップ活動 ネイバーサポートプロジェクト 参加感想

提出日	平成 28 年 2 月 25 日
学校名	筑波大学附属大塚特別支援学校

- ・一人一人の生徒さんにこんなに細やかに接している学校があることにまず大変驚いた。先生方の支援。周りの生徒たちの受け入れる気持ちの中で、不登校だった生徒も笑顔を見せてくれるようになったことに感動した。型にはめるのではなく、一人一人の個性を大切に、真の教育だと思う。
- ・「地域の学校で学ぶ」のは、子どもにとって”当然のこと”だと思うが、障害があると”当然のことではなくなる”が東京の現状だ。先生も、保護者も、「障害を理解して伸ばしてくれる学校」を進めるようになる。障害がある、無しに関わらず、地域で学ぶのが当たり前となる社会は、全ての人が生きやすい社会へつながると思う。「大空小学校」が珍しい事例としてではなく、当たり前のこととして受け入れられる社会になってほしい。
- ・すべての学校が大空小のようになると日本も明るくなるのでは、と思った。子どもたちが中学校に入り、どんな生活を、どんな人生を送るか、ということに興味を持った。木村先生を超える校長先生が、続々と生まれるといいなと、心より思った。
- ・学校全体が大きな家族のように感じた。学校は社会の縮図、本来はこのような形であるべきだと思う。
- ・「子どもだから」「発達に偏りがあるから」わからないと大人が決めつけることをせずに、しっかりと子どもが納得できるよう大人たちが伝えていたことが印象的だった。中学、高校、社会全体でこのような理念が広まるといいなと思う。
- ・「ダイバーシティ」の今、大人の社会でも多様性を認めることが難しい状況で、小学生の子どもたちが自然に取り組んでいることに、大変驚いた。筑附小の子に一番欠けている気持ちを、大空小の子は持っている。映画を見ているうちに、誰が、どの子が、支援が必要なのか、ひょっとすると「普通」と言われている子の方が、心の支援を受けているのでは。素晴らしい成長の場を持って、うらやましい限りだ。
- ・次男が筑波小に通っている。そして、大塚支援学校の生徒さんと交流を持つ機会がある。健常者のみで生活し、成長していく子どもがほとんどだと思うが、色々な子どもとの交流を経験しながら過ごすことができる次男は、貴重な経験を通して、自分以外の人のことをよく考え、共生することができる人になってくれると思う。多くの子どもが支援学級の子と触れ合う機会をもてるカリキュラムができるといいと思う。
- ・人と比べて自分がどうかではなく、自分の今の力からどれだけ成長できたかを評価する目を持つことが大切だと校長先生の言葉にハッとさせられた。
- ・私の会社でも障害者雇用を促すなどの話がある。決してきれいごとではなく、受け入れる私たちがどれほどの力量を持っているのか、社員一人一人がそれだけの人格があるのか改めて感じた。
- ・社会の本来あるべき姿の縮図になってほしいと感じる。上映後の説明にもあったが、「この学校の中だけの話…」と同じ気持ちを持った。子どもたちが大空小を卒業した後の人生はどの様になっていますか。大空小の生活が理想的に進むほど、卒業後のギャップを強く感じる子どもも多いのではないかととても心配だ。この上映の中で大阪の大学教授の話の中に、大空小の活動を続けることが地域全体の変化につながるとあった。まさに同感。社会全体として共生していける環境を世の人が、一人一人が真剣に考えないといけないと思う。今後も継続した啓蒙活動をお願いします。
- ・子どもの力はすごい!と思った。大人の勝手な解釈で押さえたり、方向を変えたりしてしまっはいけないと強く感じる。
- ・学校の目標に掲げられていた「人にされて嫌なことはしない」という姿勢、基本的なことなのに忘れがちだ。大人も常に相手(子ども)の気もしになって考えてみるという姿勢を忘れないようにしたい。皆で見守り、育てることは、即ち、私たちも(周りの子どもたちも)育てられるという部分に、とても共感した。
- ・人と人がつながって生きていくことが当たり前でなくなっている社会で、本当に久しぶりに、それが実現されているのを見た気がする。

活動に参加しての感想

